

出現するものなり。

斯く食欲の恩恵によりて、外界に於ける普通の刺戟より、發育の保全を保ち、常に生の樂しさを得るものなり。

スペンサーは、「最も強き感情の一なる憤怒も、尙食する間は征服せらるゝ物なり」と云へる如く、複雑なる人類に於ても、尙且然り、昆虫の如き者に有りては、味覺が如何に心理上の權威者なるかを思はするなり。

従つて母精の生存欲の大部分は、此食欲によりて支持せられ、彼等の生活力、發育等は、皆食欲の如何が直接影響する事は論を待たず。

聽覺の生活上の意義は、求友、警戒等を以て最も主なる者とすべきも、其他重要な意義を考究せんに、

聽覺器は、數多昆虫の体軀内の血腔中、左右に發見せらるる線狀物にして、

外は皮層の一點に起り、内端は内部の別點に懸着し、且つ神經に連續して、其狀殆ど張られたる弦の如し。聽覺は、此弦線の震動によるものにして、腹部に聽覺の有る事は、實に玩味すべき所なりとす。

發聲器と等しく聽覺も、意志の傳達に必要なものならずして、單に警戒と、單純なる感情を受授する器管にして、其發聲するものも、聽取するものも、好感を意味するは學者の証明したる所なり。

されども、單に聽覺は好感を意味するのみに非らずして、生殖期に對する自然的手續なり、秋の野に美聲を競ふ雄虫のけなげなる、美しき心を寄する音波は、此の張られたる弦線に振動を與へ、絶えず刺戟を受くる聽覺の爲め、無心に聽き惚れて居る雌虫の精は、頭、胸等に置ける中樞神經を初め、觸角に置ける半獨立的の精も、等しく腹方部に集中して、無想の境に

入る事を推理し得るものなり。斯かる現象の反覆せらるるに當り、何時か、精は頭、胸部の神経樞を離れて、腹方部の精と知覺を共にし、遂に生殖部門に好感神経を發育せしむるに至り、交尾期に入るものなり。故に交尾期に於ける昆虫は、皆交尾期前に於ける時よりも、外界に對して鈍き知覺を有するものなり。

昆虫に有りては、味覺に於て巧みに昆虫各自の好める草に就て、各自の味覺感を完全に遂行し居り、敢て他の異なりたる、如何なる草にても、同一に彼等の嗜好に投ずる如にてもなく、特に蜂の收藏する蜜の如きは、高等なる人類の味覺を以てしても、只讚美の外なき位、美味なるものなれば、中々昆虫の味覺感も馬鹿に出來ざる物なるべし。又聽覺に有りても、最高なる人類の音樂と比較して、別段遜色なき位、デリケートなる音調に對し

て、一向感嘆措からざる所にして、如何に彼等の聽覺感が、最高なる音樂的微妙なる發達を遂げ居るものなる事は、吾人の等しく肯定する所なり。其他聽覺、觸覺感等も、十分なる研究を遂げ得る物とすれば、意外の意義を發見し得る物やも計られず、従つて彼等の生活、發育等に關連したる解釋を、明瞭ならしめ得る物ならん。但し、有機的發育より見る時は、聽覺は別に偉大なる發育を遂げ居るものとも思はれず、動物學上重大なる事にもなき如し。然し、味覺機管も、聽覺機管も等しく、生理學的に、吾人を驚嘆せしむる程巧妙、若しくは複雑なる發育を遂げ居る譯にてもなければ、斯くの如く、吾人人類をして、等しく彼等の蜜を慕ひ、或は美妙的なる彼等の音樂に氣を奪はるるは、頓て聽覺等に對しても、其有機的發育の如何によりてのみ論ずる事を許さざる所以ならしむる物なる事を信ず。

上述の如く、生活力は、母精の積極的の自己保存を意味し、心理學上より論ずる時は、合目的なる活動力なりとす。而して活動力とは、活動情念の筋の支配を意味する者にして、ポールドウイン氏は、活動情念を普通情念に對して、特殊情念とし、内容情念、關係情念に對して、順應、混亂、沈思、緊縮、發展、官能となせり。而して官能を更に亢進と閉塞とに分ちたり。即ち謂所生活力は、此亢進的官能の可動性なりとす。生活力と母精の満足とは、再三記載したる如く、斯くの如く關連したる物にして、一般的生物より論ずる時は、上述の如く、母精の満足は、只徹底的自己保存に有りとすも、人類に有りては、獨り母精の自己満足のみに留まらず、大生命の實現てふ超生物的の一大母精の示命を遂行するに有る事は吾人の等しく自覺し居る所なり。

斯くの如く母精の快感は、直ちに筋の發育を誘致するも、實際に有りては、筋發育期に於ける幼年、少女は、精心的快樂よりも、有機的快樂に接する機會を多く與へらるべく、其有機的母精満足が、精心的満足よりも、言ひ更ふれば、觀念的快樂よりも、運動的快樂の方、筋發育に最も効果多く、從つて出來得る丈、自然的に彼等をして得難き此發育期に於て、有機的快樂を得る機會と方法とを、自由に與ふべきものなりとす。青年期を過ぎ壯年期に入るに従ひ、觀念的母精満足の機會に多く接し、且生活上最も必要なるものなるも、筋發育には直接の効果少なく、只筋細胞を若々しく保ち得るのみにて、等しく發育に關しては、有機的快感を必要とするもの如し。

就中、生活力の旺盛なる一情件としては、母精の筋を通したる、外向的活

動の満足なりとす、彼の柔道、角力、ベースボール等の如き遊戯に至りては、發育期に於て、最も適切なるものにして、往々讀書、音樂等の靜的なものの、反て彼等の發育を害し、神經衰弱等の病狀を醸生する弊等、起り安きに反し、運動は常に、兒童發育に有用なるべき事、今更多言を要せざるなり。然し乍ら、何故靜的母精満足が前提に反して、不結果に了る事有るやの問題に就ては、生理的説明に待つべきものなりと雖も、最も注意すべき點は、母精の外向的習慣性を薄弱ならしめ、遂に虛弱なる卑屈性を生じ、或は神經衰弱症、白痴、其他慢性的諸病の體質を構成する等に至るものにして、發狂者等の變体心理所有者は、皆發育期に於て、母精の活動的満足に對する習慣性を獲得し得ざりしものに生じ易く、彼等の母精の外向的力は、極めて微弱にして、従つて彼等と外圍との關係は、時間的、或

は空間的に少なからざる間違ひを生じ、甚だしきは、全然沒交渉なる場合少なからず、是等變体心理所有者に關して、余は數年歐米人に就て研究したる所なるが、彼等の一般的、運動好きなる國民に有りても、矢張り母精の外向的能力を損耗したる、幾多の原因を有し、勉めて孤立的生活を好み安き如なり。然れども、大体に於て、我國に於ける發狂者より靜かにして、全然常識を沒却したるもの少なく、従つて外界と全く關係の付かざる程重症なる狂者には一度も接せざりしなり。

生 活

生活の種類に就て少しく考へ見るに、其種類は幾多有る中で、最劣等なる生活は、寄生生活とせざるべからず、寄生生活をなす動物は、大抵適當な

る寄生所、即ち安全なる宿主を見出すまでは、比較的生活力を縮少し居り、或は寄生中と雖も、不適當と認むる間は、中間宿主として何等生活作用を發揮するでもなく、所謂蟄居時代を繼續するものにて、頗る横着なる性格を遺憾なく具備し居り、人間ならば生半途の愚物では出来ぬ藝當なり。考へ見れば見る程、不可思議なるものにて、斯くの如く劣等なる寄生動物の生活程狡知なるものはなし。出来得る丈自己の勞力を節減し、一切の負擔を省きて以て、最も高價なる生活の糧を、居ながら供せられ生存するものなれば、御互の横着根性より割り出せば、之が理想的なる生活なるやも知れざれど、要するに、此種の文明は動物學の暗示する所によれば、確に最下等なる生物根性なり。若し人間社會に、斯の如き種類の生活方法が、ざし／＼採用せられたらんには、其れこそ大變なり。

孤獨に生活する虫の中。以上の如き寄生生物に屬するものの外、如何なる状態に於けるも、生活方法としては、比較的拙劣なやり方にて、或は生活の便宜上群生する事は不可なるやも知れざれど、昆虫、或は小さき虫類の如き、微細なる生活物が、廣大なる空間を占領して、侶伴もなく、只蠢々として生命を全うした所で、何等意義の存するものならんとも思考せられず。されど、一見淋しき哀れなる彼等の生命も、母精てふ、比較的不滅性を有する意識物の、生存意志遂行に對しては、知何なる困難、迫害も、遂に絶体に、彼等は無意味なる生活状態に導き或は滅絶せしむる事は不可能と見え、生殖すべき時には、少なき體軀を驅つて、彼等に有りては實に幾百里にも喻ふべき距離に、雌、雄、相求めて、いつか彼等の第二の宿体を、綿々として作出し行く所を見ると、寧ろ人間の配偶經濟の不圓滿なるに、

恐嘆せざるを得ざる程自然の攝理は功妙なるものなり。

孤獨生活をなす生物の中、仔体増殖の爲、雌雄相求めて生殖するものも有れど、寄生虫の中には、一虫にして雌雄兩性なる有りて、任意生殖をなすもの有り、此の一事を以てするも、如何に有機体は、母精生存の一方に過ぎざるかを証明し得べし。

群生生活をなす生物は、大略三種に分類する事を得、

即ち 幼虫時のみ群生するもの。

群生生物 生殖の際のみ群生するもの。

生活の爲終生群生するもの。

一幼虫時代のみ群生するものに有りては、蜘蛛の如く、發生して四、五日群生したる後、思ひ思ひに生活の根據を異にして生活する爲に、散亂する

ものあり。又蚊の如く、幼虫時代の比較的長時日を、共に暮すもの等、種々有れど、之は只發育の關係上より來るものにて、別段注意すべき程の事なし、生殖に際して群生するものに有りては、各自の母精が、其仔体の機能を通じて活躍する現象も伺はれて、中々面白きものなり。先づ一度、生活の爲廣大なる空間に散在したる彼等は、生殖の期に至りて、再び磁氣の活動によりて、同類相求めて群生するものなれば、此間に至りて、彼等の母精は最も得意なる時代、即ち最も有機体も生活力旺盛なる時代を意味し、従つて母精の機微なる機能も、此時に於て最も考察するに足るもの多き理なり。

彼の淘汰に際して、彼等相互の美的觀念の如き、或は彼等の微妙なる音樂に對する複雑なる、且纏綿なる情緒の如き、或は生殖に對する彼等の熱烈

なる愛の如き、小さき虫類に比して、例へ難き程複雑なる心理状態を想像する事を得るものなり。

況んや、生活の爲終生群生する蜂、蟻等の社會組織の理想的なるをや。

其他複雑なる母精心理の表現は、表情の部に於て少しく陳述したる事有る通り、彼等の生活の方便として多大なる理性の表現を知得し得るものなり。彼の共棲の如き、或は蟹の或種の如きは「いそぎんちやく」を防禦の武器に利用し、又「いそぎんちやく」も蟹の鋏によりて、持運ばるる事に因りて、生活の便宜を來す事有り。尙「いそぎんちやく」の如き、移動に不便なる、且一見意識不確實なるが如きものより、共生を強ゆる場合有り、即ち宿借りと共生したるもの等より推斷する時は、共生的性癖を有する生物は、相互の合意的理解を有する事は事實にして、其の母精の如何に社交的、

外交的理性を想像するに足るなり。

片利共棲に有りては、必ずしも相互の理解を條件とせざるものなる事を知るを得、彼の管水母を利用したる「かつをのるぼし」の如き、管水母の生活を反て妨害するものも有り。されど母精の利用性格の功妙なる發露を伺ふ點に於て、前者より寧ろ強烈なりとす。

其他方便として、生活に利する現象は

保護色、擬色、隱匿色、擬態、廣告色、警戒標、擬勢、放臭、假裝、擬死、自割、等とす。

又生活の補助器としては、生物の一大特色なる移動器を擧ぐべきなり。

其の主なるものを擧ぐれば、軟体動物の肉足、空胴動物に有りては、水母の傘、体節動物の疣足、節足動物の節足、昆虫の翅、棘皮動物の管足等、

又背推動物に有りては四肢、鱗尾等とす。

斯くの如き幾多の方面に表はれたる生活の方便は、只に彼等の生活一般を物語るのみならず、又一面に於て母精の性格の發露として、研究し得べきこと表情の部に於て、少しく例を引用したる如し。

即ち保護色、擬色、隱匿色、擬態等は、敵を未然に避くる爲、母精の理性が遺傳的に産出したる、彼等社會の最善なる防禦手段にして、彼等の仔体を保存し、成は自己を保存する爲に、臆病なる注意を遺傳したる丈、それ丈、彼等の生活は常に不安定なりしもの如し。

生物の生活力の、各母精の意志活動と密接したる立証は、古來より信せられたる所なりし物の如きも科學の勃興以來、「一種の内住的指導力の存在を證するものなり」との意見は、非科學的なる舊式迷信の一に屬すとして排

斥せられたるも、又近代に至りて、歐米人間に於ても、舊思想の復活を主張するもの有るに至りたるは、常に眞理の勝利に歸因するものにして、何等實質的に變遷を來すものに非ず。

然れども、細胞の生活力に窮極の推理を及ぼす時に、等しく細胞の生活力も一種の内住的指導物によれるものなりとは云ひ難し、細胞に靈ありとの假設に關して、エルンスト、ヘツケルは「細胞の靈は、それ自身非意識なり」と云ひ、細胞には細胞の靈を想像する事を、認容したる如し。然るに若し「細胞の靈なる假説によりて、考察する時は、生物の生活力は、此微細なる諸細胞の靈と、何等か關連して考究し得るものなるも、それ自身は非意識的なるを以て、別段生物の活動と、其生物を構成する一細胞の力とは、直接交渉なき物と見るも差支なからん。然し單細胞物の生活は、細胞

の力其れ自身が生活力の主腦者なれば、一般動物學上の定説の如く、生活の物質上の基礎は原形質なりとなすに一致するものなり。原形質の化學的成分は、含窒素有機物なる蛋白質類の數種、及び含水炭素類、脂肪類等の有機化合物等、尙水、及び數多の無機鹽類、即ち鹽化ナトリウム、鹽化カリウム、磷酸ナトリウム、磷酸カリウム、磷酸カルシウム、硫酸マグネシウム等を含む。

其の存在状態に就て見るに、流動状態間質中に遊在し、共に膠様状を成し、此集合状態は、生活の發動に重要な關係有りとは、一般科學者の主張する所にして、科學者の立場としては、絶体に他に生活の原因とも認むべき、特殊の勢力の存在すべき事を否定し居れり。即ち胞の靈、或は他に生活原因となるべき、生活素とも稱すべき固有元素の存在等に付きて、否認し

居り、本論に於て主要とする母精の如きは、到底認容すべき所に非らず。然し乍ら、本論より見るも、原形質が生活の物質上の基礎なる事を信ずるを妨げず。加之尙一步進んで原形質が如何にして生活發動の基礎たり得るかに就て、科學上の完全なる説明を得たき物なり。

原形質は二種の流動体より成りて、一を泡質と稱し、他を泡間質と稱し、隔壁状を構成す。其横断面を想像すれば、網状をなし、其網の交點に小粒状物有るのみにて、何等原動力たる可き、複雑なる構造を認めず。只學者は、生活の根本的現象として、原形質の動的特質を分類して、伸縮性、感受性、物質代謝、成長、生殖作用、の五種類に分ちて説けり。即ち感受性とは、光線温度の知覺、餌食の知覺、其他一般外來的刺戟に對する知覺を云ひ、物質代謝の動作は、即ち餌食を同化し、自己の新生体を構成し、舊

有機体を排外する作用を稱するなり。成長は、有機体の増殖を意味し、一見静止せる如き卵細胞は、分裂生殖によりて絶えず内的成長をなし、決して静的ならざるなり。生殖は原形質に有りては、分裂生殖を意味するなり。然し乍ら、生物特に高等生物の生活と、其一細胞の生活現象と直接交渉なき如し。但し各有機細胞の活動停止は、生物の生活停止なれば、研究する必要なきに非らざるなり。

動物學の説明によれば、前述の如く、生物の活動の根本的現象を細胞活動と做すも、細胞の活動に對する根本的問題を説述する點に於て、少しく物足らざる感なきに非らず。只動物學上にては、細胞の運動は如何にして行はるるやに關して説明して曰く、細胞は先天的に、趨性を有し、或は光線に向ひ或は異性を牽引し、其他彼等の生命實現に必要な活動力を具有す

る者となし、一般に是等の現象を、運動胞子の先天的能力と做せり。然れども、吾人の立場より見る時は、細胞の運動に限らず、生物に先天性意識の存在を許し難し。

細胞の運動の特質を、動物學上感受性、物質代謝、成長、生殖、伸縮性の五個に分つも、既に根本義として述ぶる場合に有りては、五個異なりたる現象を感受性の一點に集中し、歸納して説明し得るものならんと確信するものなり。尙感受性と稱するものも、總ての外刺衝に對する感受性中より、終局の一點に歸納し得て、始めて細胞の根本的運動現象を説明し得るものと信ず。然らば此終局の歸一點たる感受性とは何なりやと云ふに、余

二は説明を附して磁氣の感受性なりとなす。
 扱て生物若しくは、無性物の磁氣に對する感受性が、如何にして根本的諸

運動の原因なるかを詳述せんに、先づ、假に生物若しくは植物細胞にして、先天的に磁氣例へば微細分子間の牽引、反撥の不可思議なる力の存在、地球引力に因りて支配せられ有る有体物の諸現象、地球と天体及び全宇宙の關係、空間に充滿する微分子と宇宙引力との關係の如き、偉大なる力の壓力に對する反應は、微々たる細胞の感受性に對して常に最大、有意義なる反應なくして休むべき物ならざる事は第一に推理し得べき物にして余は此絶大なる磁力の細胞に加へられたる反應の結果として、感受性の根本義たる、磁氣の感受性を產生したるものと做し、此種の感受性を以て萬般の感受性を演繹歸納し、且他の運動の特質をも抱擁せしめ、最後に於て先天性意識全般を否定せんと試むるものなり。試みに思へ、地球の表面が收縮して、凹凸不同の個所を生じたる時、水の如き微弱なる分子の集合物は、自

から自己存住を規定する事不可能にして、表面の凸出によりて排除せられ、凹所に至り、大なる巖石に堰かれては進路を曲折し、或は流れて河となり、湖を作り、或は海を形成する等、先づ強大なる物が先に各自の存在を規定し、次第に微弱なる物の歸着すべき箇所を與へられたる如く、總ての現象は、微細なる物が先づ偉大なる勢力の規定に支配さるゝ物にて、微細なる者の自發的勢力の自由存在は許されざるものの如く、細胞の感受性の如きも、等しく先天的自發能力の存在を許容し得る事は如何にしても不可能なり。假に感受性を先天性とするも、磁氣に對する感受性を以て第一の意義と解釋せざる可からず。

然らば磁氣の感受性とは何なりやと云ふに、他なし、反撥と牽引是れなり。唯生物に大氣の磁氣が作用したる場合に、複雑なる磁勢を生じ、複雑なる

作用をなす、是れを直ちに生物磁氣と名付け得るなるやも知れ難し、兎に角細胞の場合に有りても等しく、生物磁性所謂磁氣に對する感受性として實例を示さんに、彼の異性求引、同性反撥の如きは即ち磁性の特質にして、逆睹し難き實在性なり、趨光性の如きも、等しく磁性の説明にて解き得る物と信ず。如何となれば、總ての物は物理的説明にすれば、一定の方向より加へられたる力によりて、或物体の場所に變化を來したりと假定せば、其力の不斷に加へらる場合に於て、其物体は等一運動を持續する物なる如く、光線の刺戟に因れる細胞の磁氣の變化に供ふ細胞の存在個所の變化は、其刺戟の繼續する間は、同一變化を繼續するものなる事を推理し得べし。其他感受性として分類せらるべき事項は、總て同一なる物と信ず。物質代謝は如何と云ふに、磁氣、或は電氣が、微細なる塵埃を牽引し、暫

時にして反撥する現象と等しく、或る物質を牽引し、自己と全く同一性を附與したる後、急に反撥し安き部分を生じ、反對に、新しき物質を吸引すべき傾向を生じ、絶えず反覆するを物質代謝の現象とも見得べく、分裂生殖に於て、特に然り、最初異性物を牽引して同化し、後反撥し、分離する物と見做し得。成長は、生殖の結果なれば、説明を要せず、唯伸縮性に至りては、生物磁氣の複雑現象として見るを最も適當とす、即ち稍複雑なる磁氣の反應なりとす。

最後に磁氣の感受性は、細胞自己の有する自發性能力にてはなく、若しくは、運動胞子の先天的能力にてはなく、磁力てふ偉大なる力、若しくは生物磁氣を通じて、作用する磁氣の偉力に對する反應にして、細胞には何等意識なく、又は先天的自發性、運動能力なしと斷定し得る物なり。

以上に於て、畧自己の所信を述べたるつもりなるも、細胞の生殖に對する、磁氣の説明に就て、稍不足なる感有れば、細胞の動物學上の構成より述べて、細胞の生殖運動を考察せんとす。(以下飯島博士の動物書により摘要) 『細胞は單獨にて、一個の生物なることあり。又數個結合して、一個生体を構成するあり。前者は單細胞生物にして、後者は復細胞生物なり。而して、外形は種を異にして一定ならざるも、其單純なる原形は球圓狀なり。其大きさも、亦著しき消長あれども、概して微少にして、顯微鏡に依て見るに非らざれば、細檢すべからず。凡そ細胞が榮養を受け、呼吸し、且つ排泄するは、皆其外表面に於て營まる。

細胞には形質を異にする若干の部分あり。其は原形質の異性分化より起りて、特殊の作用を分擔する局部、若くは物質なるか、然らざれば、原形質

の產生に係る非能働性物質なり、生理上重要な作用をなすと認められたる部分は、胞質、核、中心體、及び粒質體の四を以て主なるものとす。一胞質は細胞の大部分を構成し、又細胞体とも云ふ、此部分は普通狀態に在る原形質にして、其の形質は概ね前記の如くなるが、細胞の種類によりては多少異れり。核は一個胞質中毎に含まるる、小體にして、其の作用の靜体期間に在りては、概ね球圓狀なり。然れども、稀れには紐狀、又は放技狀を呈す。此の体を構成する原形質の全般は、核質と稱せらるるものなり。更に核質を三つに區分して核液、染色質、仁質となす。核液は鮮明なる流動體なり。而して核液少量なる時は、全核は緻密性にして、其豊富なる時に有りては、胞狀に見ゆるものなり。多くは胞質に對して、判明なる分界膜を有し、之を核膜と稱す。

染色質は核液中に在りて、顆粒状をなし、平等に散在し、若しくは粒状の連鎖状をなして、核網に懸着し、或は數個の不規則形小塊をなして、核中に散在す。

仁質は染色質に比して、染色力の遙かに微弱なるものなり。然れども此の兩質間には、密接なる關係ありて、時に相結合して存在し、各識別し能はざることもあれども、通常仁質は染色質と分離して、後者の傍に一個、或は數個の球圓状に塊を形成す、之を真正仁と稱して、前記の染色仁と區別せらる。核中に染色仁と、真正仁との存在する時は、兩者密に相附着せるが普通なり。

染色質は遺傳媒介の物質として、緊要の役目ある者なり。されど仁質の生理的機能は、未だ明瞭ならず。

中心体は胞質中、核の近側に位置するを通例とす。雖も、稀には核内に発見せらるることあり。極微の球圓体にして、其の中に一個或は數個の點狀顆有る事あり。

是を中心顆と稱す。中心体を直接圍繞する原形質は、特殊なる球圓体の一に區域を成すを常とす。該區域の物質を中心質と名づく、中心体は細胞毎に一個あること一般なるが、時としては一中心質中に二個に分割して存することあり。平常は中心體一個を示す細胞の場合と雖も、該細胞の將に分裂せんとするに際しては、該体は必ず先づ二個に分割して、兩娘細胞に各一個づつ分配せらるるものなり。此の特殊なる細胞器官は其の極微なること、非染色性なることによりて、學者の久しく発見し能はざりし所なりしが、現今にては其の存在、殆ど一般的なるを知るに至れり。

粒質体は複細胞動物の諸種細胞に、普く存在する一種の細胞器管なりとのことなり。开は胞質中に含まるる數量不定の顆粒狀、乃至絲片狀物にして或る染料によりて、濃厚に染色せらる。又是と類似の物質あり。單細胞動物の體質中にも有りて、染色小體と名づく。』

以上の如き構造を有する微細物質の生殖に關して尙動物學上の説明を記載すれば。

細胞が分裂生殖を行ふ場合には、中心体は平常よりもより以上明白となり、(中心体の存在は場合に、據りては認め難き場合多しと雖)微細なる星狀を呈し、二分に前後して該体を圍む、中心体は數條の纖細なる胞質中に散し、星狀形の各放出部を延出し初め、暫時にして二個に別れ、徐々に懸隔を生じ、遂に核を夾んで對立する位置を取り、愈々核動開始に當りて、

核内の染色質は大に存在状態を變更し粒々集結して、一條の細長にして、且つ蟠屈する紐狀体を形成す。即ち染色綫紐を形成す。

此染色綫紐は、間もなく數個に切斷され、遂に左右相對に、各星體なる中心体に引付けられ、胞質の分割を誘ふ、胞質の分割は兩星體より、等距離の外面に於て、緊縮し初め、最後に自体を等分するに至る、此間に有りて染色體、及び仁も其母体に於ける平常體と同一なる状態を保ち、全く分裂を完成するものなり。

細胞一個の分裂すら、斯くの如く複雑巧妙なる手續を経過すべき物なるを以て、必ず細胞の各異なりたる部分に於て、各異りたる機能を具有するなるべく、例へば、中心体は細胞の主腦部分、染色體は遺傳に關して、主として意義有る者とか、色々其れぞれ特長を有する事、恰も人体の内臟器管

の如き者と見做され居るなり。

されど、中心体は全細胞の支配器管なれども、極めて簡單なる如し、如何となれば、假に中心体が極めて複雑なる器管を、其れ自身の機能遂行の爲に必要な者とせば、必ず複雑なる諸機管を抱含すべき、より大なる容積を要すべし、然るに、不可思議なる動原力とも見るべき作爲に拘らず、全く微細に過ぎ且つ簡單なるは最も注意すべき點なりとす。

思ふに生物にあれ、植物に有れ、餘りに微細にして、且つ複雑極まる構造を有する事實より推斷する時は、全く古來より信じ來れる靈理等、所謂舊思想として見做されたる、非科學的説明は、複雑巧妙なる物質、若しくは生物に關して、餘りに簡單なる解釋を降して、以て、得々然たりし感なきにしも非らず、然れども、複雑なるは、有体的實在物の特色にして、不可

測なる靈理機能は、彼の細胞の説明に於けると等しく、割合に簡單なり。然も其機能は、微妙不可思議なる者にして、到底科學(物質)上の推理を許さざる所なりとす。

病 氣

昆虫の病も、一般生物と等しく、生理上の解決に待たざるべからず。即ち内臓器管の障害、或は外部の損傷等の他、何等異論を生ずべき事柄ならず。其人類間に於ける、精神的病疾に相當する病狀を、昆虫等に實驗する事に至りては、少しく奇異なる感なきに非らざるものなり。

病疾は、其原因の如何を問はず、既に自己の身体に、障害を感ずる程度に進冗したる者に有りては、人類に有りては、特に疾患局部の刺戟より受く

る苦痛よりも、精心的不快に伴ふ、苦痛の方大なるものなり。加^{しやのみならず}之、大抵の病氣に有りては、其病狀の悪化するは、病の増進と、精心的苦痛とは、輪還的反覆刺戟の關係を有するを以て、如何なる病氣も、一半に於て、精神的病患と見做すも防げず。故に精神病者ならざる患者、例へば不治と見做されたる、肺病患者が、醫藥に飽きて、尙何等功果なきもの、或は醫師の不注意なる放言、又は付添人等に洩らしたる、自己の疾患の、到底治すべからざる、絶望的宣言を耳にして、寧ろ池川に投身して、望みなき、懊惱^{おうれう}の境涯^{きやうがい}より、一瞬も早く逃れ、而して、死の爲樂に歸せんまで、思ひつめたる可憐なる此患者が、ふと神佛の加護によつて、今一度、此世のものたらんとする、切なる一心によりて、親切なる、近鄰の人の勧誘^{かんいゆう}に従ひ、天理教信者となり、或は弘法大師に、希願を掛け、若しくは、何々稻荷、

何々神佛の祈禱に會ひ、供物^{くもつ}を頂き、御水を飲んで、初めて、平素は誠に不信神で、神佛に參詣^{さんげい}した事もなかつたが、何だか有難い如^{やう}な氣もする、氣のせい^{せいか}か、病氣も今は少しよい如^{ごと}だ、^{なぞ考へて居る中に執着心^{しやうちやく}も起きて、自殺する氣もなくなり、いつの間にか、快方に向ひ出し、ついに全快し、再び健康を回復して、生活の道にいそしむ、幸福なる身体に立もどつた、人の話も時々耳にする所なり。}

其は祈禱者、布教師等は、全々病原に關して、一切不明若しくは、何等病氣に對する、知識を欠くも、病氣の通有性なる精神的苦痛、即一般病氣の共通的半面のみに對して、病の差別に拘泥する所なく、一樣に、神佛の御力を確く信じて、其等の病者に、供物を別ち、祈禱をする時、以上の如き、此世に望みの綱^{つな}の切れ果てたる人の心に、神の力でふ、絶体的、保護を見

出して、如何に彼等の心理に、強き變動を來したるならんは、想像するだに、餘り有る者なり。従つて其反應の顯著びんちやうなりしも、當然の推理なり。此點に於て、精心療法は、醫術の復雜なる物に比して、遙はるかに一步進んだる療法なるは言を待たず。

然し人知の程度の低ひくき時代に有りては、或は信仰しんかうによれる療法等は、意外に弊害を伴なひし如きも、一般人士の、信仰に對する、理解を有する文明人に於ては、何等昔日の如き、弊害を醸生じやうせいし能はざるに至り、此種の精心療法は、實に重要なものとなるべきなり。

如何となれば、醫學の知識が、一般的に普及すればする程、吾人の身体は、病に對する抵抗ていこうりよく力は、薄弱となるものなればなり。尙詳言すれば、醫學知識の多き者程、其病狀に於ける場合は、自己の病氣に對する心配は、何等

知識を有せざるものよりも大なり。而して、此心配が、精神せいしん的疾患、其物を醸生じやうせいするものなれば、醫學は、病を未然に防ぐには、最も効果多きも、一旦、病に浸されたるものに對しては、寧ろ結果の惡き物なり。但し、快方に向ひつゝ有る、患者に取りては、強信念を自覺し得るを以て、一利、一害とは言ひ得るも、精神療法が、文化に連れて、病者に對する弊害が、除却せらるる性質有るを以て、尙優秀なる立場に有るものと、斷定し得べきなり。故に、歐米等にも、科學的醫學の領分たる、普通病者に對しても、所謂いはゆるブツウドクターの如き、精神醫術者が、施術しじゆつし居る所も有る如にて、精心療法が、如何に病氣に對して、權威有る者たると、同時に、一般病氣が、精心作用の範圍を脱し難きかに想當す可し。昆虫等に於ても、病氣は絶体に精心作用を除外して、觀察すべきものに非らず。特に前述の

結論によりて、病氣等のみならず、不快が母精の解体を、誘致すべきものなれば、昆虫の如き微細生物に有りても、精心作用より來れる病氣を、實驗し得るなり。今一例を示さんに、

米國カリホルニヤ州の或る部分、及びメキシコ等にては、農家に近き宿場等の店頭に、金網製にて、一尺の直径に、高さ二尺位の蠅取籠を、用意し有る處有り。各農家より、買物に宿場に來る人は、大抵乗馬で有るか、さもなければ、自家用の馬車で往來する爲め、(最も近來にては、偏鄙なる所にては、大方自動車を用ひ居るも、十數年前までは、舊式のまゝなりき)各所より持ち來れる、蠅の巨多しき事、實に言語に絶する程にて、到抵我國の都市にて、流行する、發條仕掛の蠅取器位にては、間に合ふ物に非らず。實に一日の中に、此大なる螢籠然たる蠅取籠に、一升も、二升も、壘

々として、死殻を積み上るのを見たる事有るも、驚きたる事は、蠅の巨多なる事よりも、此大なる籠の中に、下の漏斗を伏せたる如き穴より、續々と入り來る蠅が、尙内部の空間が、蠅の自由なる運動を防げず、且光線も、空氣も、外部に於ける場合と、大差なきに拘らず、意外に、蠅の自滅を早からしむる事實なりき。今し方這入來れる蠅も、見て居る間に、活動力を失ひて、壘々たる死殻の中に、埋まつて終ふなり。何故に然るかと、考へ見るに、先づ最初、好奇心に驅られて、這り來れる蠅は、内部に入りて、初めは、何氣なく、ぶん／＼歌ひながら、上昇したり、網の目より外部を覗いたりして居る間に、知らず、知らずの間に、彼等の磁氣の知覺によりて、彼等の身体に變動を來し、瞬時にして、ぶん／＼云ひながら、死殻の推積せられ居る、下の方ばかり飛ぶ如になり、遂には、死殻の中に、もぐ

り込んで死んで終ふので有るが、百は百、千は千、皆同一の経路を取る事を實見したり。然し最初に入りたる者、若しくは、餘り死殻を積まざる場合に有りては、彼等は、他のものよりも、比較的長時間生存し得たるならん事は、容易に想像し得るなり。如何となれば、内部には、何等滅殺する爲に、薬等を施したる物にてもなく、唯金網にて造りたる、比較的容積の大なる、内部に於て、空氣も、光線も、外部と大差なし、彼等が餓死するか、或は渴死するに非らざれば、到底、容易に、彼等が死に到達すべき物に非らず。

試みに、蠅取紙に仰向に附着して、悲鳴を揚げ居る蠅に就て見よ、彼等は殆ど十二時間以上、二十時間の長時間、生存し居るに非らずや、實に、此蠅取器に這りたる蠅の自滅こそ、大に意義有る物なりとす。

此場合に於ける蠅の死に至る徑路は、即ち蠅の精心的に得たる病状と見るべし、且つ精心作用より來れる病氣も、昆虫に有り得る事を証明するものなり。病氣なる物の定義は、先づ「直接、或は間接に、生活機能に障害を生じたる状態に於ける生命現象なり。」

故に、自己が醫藥の必要を感ぜざるのみならず、少しも、普通の状態と何等異なる所なき如き場合に於ても、一般に、病氣なりと云ひ得る現象少なからず。彼の恐怖觀念の如き、或は一般的感情障礙、若しくは夢の如きも、或一種の病とも見得べく、其夢の如きは、普通の場合、即ち翌朝に至りて、昨夜何か夢見たるも、何事を夢見たるか、意識し難き場合、又別に氣にもならぬ場合等は、別段何の差障りもなければ、悪夢、或は同一の事柄を毎夜夢に見たり、若しくは其翌日に於て、實際で有るかの如く、極めて明瞭

に意識し、然も其れが、非常に氣に掛かつて仕様がな場合等は、等しく生理上の缺陷より來るものたる事を知覺し得べく、輕微なる病狀と見るべきなり。殊に、小兒の夜鳴き、寢憑、寢小便等は、明白なる病氣にして、共に身体の發育に多大なる影響有る事は、一般的病氣と撰ぶ所なし。強迫觀念に有りては、小兒には固質の物極めて少なく、或時代を經過すれば、自然に治癒する如にて差閤なき如きも、發育上重大なる問題なれば、是等症兆に對しては、衣服、身体の清潔を第一情件とし、精心の休養、及び醫師の診斷を乞ふ必要有りとする。

夢は小腦に於ける不秩序なる部分的活動より生じ、時には習慣性となる事有り。

精心的疲勞、或は興奮症等より來る事多く、殊に精心の安住性を却かされ

たる時最も多し。

昆虫の如き小動物に有りても、等しく、夢は存在する如く、彼の胡蝶の夢等の古人の言は、只想像上の事實のみならず、實際に於て有り得べき結論に到達し得べきなり。彼等の母精が、知覺完成に供ひ、伴獨立的生存を爲し得るに至り、不休の活躍に對して、有機体の休靜を裏切つて、尙自己の活動を繼續せんとする際、仔体の休靜は不時に、且つ不調和に破らるるなり。故に仔体の有機器管の活躍と、母精の活動意志との連絡不完全となり、加之ず、母精の意識も、有機体を完全に支配したる時、最も完全にして、斯くの如き場合に於ける母精の意志活動は、轉錯、混乱、不確實なればなり。彼の犬の虚に嘯ける、鳥の夜なき、目白が深夜にばたつく等、皆此夢てふ不可思議なる現象の存在によるものにして、昆虫に有りても、蟬の

夜鳴き等に有りては、最も明白なる事實なりとす。
 人類の夢に有りても同一の推理を許容するものなるも、全々同一なる觀察を許さざるものの如し。

如何となれば、生物磁氣の存在状態が、他の生物の如く、單純なる能はず、自然的存在を否定して、各所に於ける、異なりたる人類の生存が、各自の社會構成の上に、最も都合よき理想の實現を希求する心理に對應して、各異なりたり磁氣の存在を肯定し得る物なり。例へば、地方の制度、習慣、迷信、宗教觀念、道德的觀念等は、即ち各異りたる集團的磁方の存在如何を表白したるものにして、其昆虫等の如く、單一など推理を許さざるものの如し。

要するに、下等生物に有りては、集團的磁力（假に精の合成力を斯く名命

したるもの)の支配力よりも、各個に母精を分附して有し、各自の母精の支配に基きて、生命を實現し得るものの如く、人類に於ける夢の現象げんしょうの如きも、少しく此點に於て異なるなり。
 其他強迫觀念の如きも、母精と仔体との意志錯誤さくごより來るものなれば、母精の完成期を過ぎて解体期に入る頃には、昆虫の如き小動物にも、明白に存在す可き理なり。

以上の事實よりして、病氣は生物に一般的に存在する現象なり。然して人類に有りては、極めて普通の出來事にて、生物生存の意義に對して、頗る矛盾むじめんしたる厄介物たる觀有るなり。

斯の如き無意義、且厄介なる現象も、人類の如き靈性の發達したる至高の磁氣に支配せられ有るものに於て、尙此不合理なる現象の存在する有るは、

畢竟生物の生存は、仔体其れ自身の都合よき存在のみが、最終の目的たる事能はざる証據にして、其不合理の如く觀測せらるるは、未だ人知の不可及なる範圍に置れたる、真理の獲得に至らざる、過度期に有る者と見做す可し。強て病氣に對して善意の解釋を下せば、富者も、權威者も、野心家も、惡人も、小供も、皆等しく其病氣に懊惱して居る間は、病氣其物に對する苦痛以外に、何等汚染の觀念を持たざる事にして、病氣に於ける苦痛は、其勞働に於ける苦痛と何等撰ぶ所なく、共に神聖なる者なる事なりとす。

死及び結論

昆虫に有りても病中に有るものは大に食欲を滅殺する事は養蠶所に於て目

載する所なり、味覺と病氣との關係は眞に不思議なる者にて吾人も屢々經驗する所なるが少し氣分が悪くても直ちに食欲を減じ安く、重病に至りては絶食を敢てして何等空腹を感ぜざるなり。

味覺と病との關係は斯の如く密接にして醫學上の解釋以外解釋なきにしも非らざれど先づ醫學の説明に待つを完全とす、味覺は只に食欲を促進し自己の有機物質の新陳代謝に備へ新らしき有機物を構成する材料を進んで攝取せしむる爲に與へられたる快感のみならず、昆虫に有りては彼等自己の意識を統一し、母精の存在を確實ならしめ、外界其他の刺戟によりて母精の解体を遅延せしむる一方便にして是等母精は一面に於て食物の美味によりて存在の満足を知覺するものなり。

又食欲ば精心の統一性を偉大に所有する者にして其他酒好に酒、煙草好き

に煙草等、如何に味覺によりて伴ふ嗜好は或る一種の生活の必要素なる事を前述の味覺の説明によりて想像すべきなり。されば味覺の減退の如きは重大なる注意を要する者にして、是が回復の方法としては醫藥療法により健康回復に待つべきは勿論なるも、直接に精神的味覺回復を試むるも一方法なり。其は最も簡易なり、先づ食欲減退を來したる場合は極めて美味なる者乃至は平素自己の最も嗜好する者等を撰ぶを最も通則とすれども、其は大に考慮すべき事なり何となれば食欲の旺盛なる時即ち味覺の完全なる時にこそ美味なる食物も適當なれ換言すれば美味なりと普通に感ずる食物は大抵複雑なる味感を意味するを以て斯の如き味覺の不完全なる時、即ち感味力小なる時直ちに是等最高なる複雑な味覺を要する美食を撰ぶは不自然にして効果なきのみならず、根本的療法としては不適當なり。故に單純

なる味覺に適應したるもの、即食鹽を用ゆるを最も適當なりと思す。然も大量なる時は反て味覺をして不確實ならしむるものなれば、只一粒づゝ病者の舌端に置く可し。幾回でも然る時は其病者の味覺は此味の單位によりて喚起せられ次第に秩序的増進を來し遂に平素の複雑なる味覺に堪へ得る状態に至る。然る時に吾人は其病者の健康を醫藥以外の方面よりも回復し得る結論を得るなり。之に反して齷瘴等の特種なる病氣を除きては病者の聽覺は非常に鋭敏となる（他の感覺機能は鈍重となるに逆比例して重病者の聽覺は明瞭となる事少なからず）。故に病者の有る間は極めて雑音を謹まざるべからず。如何となれば病者の心理状態は非常なる苦痛の來襲したる時を除きては極めて鎮靜的なればなり。

況んや死に近づきたる者に有りては往々年老ひたる齷瘴者が意外に微細なる

物音に驚く事等有り又特異なる現象として或る神秘なる聲を耳にし得る事有り。是れ人の死季に近づくや瑣々たる雜念もなく只心身を虚空にして居ながら偶然に大我に没入する事等有りて斯かる奇なる現象を出現し得るものなり、斯くの如きは何人も死地に立たざれば得がたき事柄なれど聽覺が病氣によりて明確の度を増加する事は何人も實驗し得る所なりとす。而して死の一刹那を除きて病者が聽覺を減じたる場合の如きは極めて稀にして斯の如き特殊なる場合に有りては此病者は常に長壽を保ち得るを常とす。視覺は其他の感覺と等しく病者に有りては等しく不確實となり安く如何に明確なる意識を有する病者も視覺の働きは鈍くなる如なり。昆虫の死季に有る者は其人類に於けるとは大に趣を異にし病氣によりて死に至る者は極めて少なき如にて其大多數は生殖によりて移精し若しくは産

卵によりて母精を喪失して意識鈍麻の状態に入り何の苦痛も悲哀をも止めざる者の如し。

死は生物の種に應じて經路を異にするならんも、自然に來れる死に對しては皆一樣の觀察を遂げ得るものなり。前述の如く昆虫は母精の離解によりて死季に入るも仔体其物より考察する時は自己の成熟を意味し自己の肉體以外に自己の存在を認識し得るに至る一大階段なりとす。尙臆測を逞しうすれば、恰も卵の生熟が鳥と殻となり得る如き者なるも死後何程の時間の後鳥と卵殻との二物体の如き現象を認め得べきやに關して米國の或る學者は多大の犠牲を賭して死者の研究を續けつゝ有るとの事なるが何人も未だ此點に關して結論を與へ得る者有るを聞かず。或は百年を以て數ふる程永遠なる時日を経過したる後なるや將亦生物の壽命と數理的關係を正確に

有する者ならんと信するものも有れど確實ならず、米國等にては病院内に
病院の所有に有る墓地を構内に持ち一見寺院の如き觀有る所にては皆此恐
ろしき死者の研究に資するとの事なり。

然らば古來我國の佛教信者の信せし如く三才の赤子が死すれば彼れは靈化
して三才の佛より靈的生命を得るならんかと云ふに恰も林檎や梨の實を取
り來りて是れは林檎の實若くは梨の實なれば是れより其れぞれ梨や林檎の
實生を得るならんと斷定するも其れ等の果實が今花梗に生じたるばかりの
果實を取り來りて是れも梨、林檎の果實なり故に其れぞれ同種の實生を得
べしと斷するも實際に於て理論に一致せざるべし。其は果實に實生を生ず
べき可能性を生ずる迄の時間を考慮せざりし故なり。靈に於ても必ず斯く
有るべき者にて三才と云はず、充分理解力を具有するに至りたる成人に有

も一定の成熟期（不明なるも）を經過したるに非らざれば彼れは永劫靈化
する事なかるべし。

虫類其他の生物に有りても必ず總ての場合に於て母精たる資格を有する者
ならず。是等の半成物は恰も水が今一度の下降によりて持來たさるべき結
氷も一度の温度の差にて結氷する能はず、其容器を破解する事によりて地
上に浸滲し了する如き事又推理するに難からざるなり。

かつて本論に於て生微素として想像したる物は、即ち此種の還元的生氣、
即ち生物磁力の傳導要素の假説にして細胞が相牽引して以て自己に同化し
其同化性を生じたる時反撥して兩分する作用は生微素の同化作用と名命す
るを妨げざる物と信ず。然して此生微素なるものを考究せんに吾人は幾千
億の生物中或は以上の推理より精化し得ざりし傳磁性物質と想像するも、

亦種の絶滅によりて母精の確實なる生活意識を滅失し或る長時日の後、遂に生微素となりたる者、即ち滅絶生物の精の還元したる物質をも同一物質となり得るものなるべしと假説し得べきなり。是等の生微素は或は不幸にして單細胞たる下等生物となる事も有らん或は幸福にして一躍最高なる人類の細胞として同化する事も有らん。或は反對に人類の肉体より離れて獸類の細胞として同化するものも有らん。

斯く一度生微素として生物磁性の可能性を得たる物質は常に生物の磁氣によりて牽引せられ、誤ちて植物若しくは礦物に後戻りする事は絶体に無き事を信ず。(少なくとも此地球に一生物の影だに留め得る間は)

生微素は實は餘りに大膽なる假説なるも現在化學者の發見されたる分子の何物も生物磁氣てふ不可思議なる實在勢力に反應する分子、或は原子なき

場合に於て確實に靈の存在を實際の上に肯定し、然して靈は科學上の原子若しくは分子ならざる物と假定すれば或素の集成物と推定し得べく此化學分子以外に實在する素を假に生微素と名命したるも不條理なる推定に非らず。

斯く論じ來る時に赤子は尙分解して有機体と生微素の集團と見做し得べく其生微素の集團は靈ならずと云ふ事を得る者なり。

先篇に於て生物の有機体は母性の自己満足の爲に用ひたる方便なる事は稀に肉体と肉体との結合によらずして母精が自己保存に供すべき新生を同一肉体内に單獨に構成する事あり、即ち仔体の交合によらずして單獨に新生を作出する事有り、無精生殖、兩性生殖として下等生物に現はれたる現象は明白に有機体は母精の生活方便なり。然れども、母精の自己満足に伴ふ

副産物として仔虫よりも新らしき精を産出する譯にて生物の繁殖は直に精靈の増加を意味し精靈の増加が生磁氣の勢力を増進せしめ窮極の推理に於て生磁力が萬物を同化する事に歸着すべし。

生物磁氣を磁石に感應し得る者と見做して磁氣なる用語を用ひたるなりと或る書物に有りしが生物磁氣を以て絶大なる宇宙の磁力に感應し或は傳導したりとし、其磁力を自由化したる者は即ち生物磁氣なりと推定すれば生磁氣なる物質も強ち生物体よりのみ化成せらるるものとのみ断定し得べからず。地球生成の初め若しくは宇宙創生の秋に有りては生物の存在は想像し難く従つて生物体より還元したる物質のみと断定し難し、生磁氣は無制限に存在し得るものなるやの點に就而何等研究の手係り無ければ其れ丈生物より還元したる生磁氣も生物より生物に間斷なく轉々するものなる事を

保証し難しされども、生磁氣も一種の物質なりと想像する時は多少地球表面に接觸して存在するものは殆ど地球の表面より極限に遠ざかりて存在する所謂生磁氣と同質物を想像したりとするも理論に於て地球の表面に接近したる者が先づ生化すべきを最も穩當なりと思爲せらる。

尙遡りて死なる現象を考察せんとするに一般死なる現象は生物が生活を停止して同時に其有機細胞も増殖若しくは新陳代謝の活動をなさざるを云ふも、實際に有りては人間の死の如きは一晝夜呼吸を恢復する事もなく体温も冷却し脈搏なき時は死したりと見るも大なる間違ひなき如きも昆虫等にも有りては冬眠の如き現象有りて一見死と別辨なし難き事有り。兩棲類等も亦然り、故に死の要件としては必ず再び生活を開始せざるを必要とす。本論の立場より死を見る時は、死なる現象は生物が有機体と生磁氣或は有機

体と精との要素に分解して再び原状態を繰り返さざる一變化なりとす。然して死は以上の如きものなるも生物の死の状態に有りては同一生物と雖も各其境遇を異にする如く死に際も各異なり。況んや異生物間の死の状態の如きは大なる差異有るものなり。

別段死の状態に關して研究する必要も起らざるも精の存在即ち本論の主題たる虫の「タマシイ」なるものの實在を証明する一手段として二、三不自然なる虫の死の状態に就て研究せざるべからず。

試みに蝶を捕獲し樂品を用ゆる事なくして殺さんとするにピンを以て其頭部に貫き置きたりども蝶は平氣で幾時間も生存するものなり。又水中に沈め置きても中々死ぬものにてはなく、弱き如にても生物は各可成り性强きものなり。元より捻り潰して終へば何の事はなきも餘り殘忍なる手段を用

ひず。又原形を破損せず殺すとすると少しく考慮を要するものなり。同じ虫の中にも種類を異にすれば各手段も異ならざる可からず。蚤の如きは一寸捻り潰しても頭丈何時までも動いて居る事有れど最も火に弱きものにて巻煙草の燃えさしで一寸押えた丈にて容易に死するものなり。さりどて蜘蛛の如きは焼火箸で衝刺しても死するものにてはなし。蝶の如きは未だ試みたる事なれども、概して昆虫は有機体の干燥によりて容易に死する者なり。例へば紙袋に蝶其他一般昆虫を入れ炭火の上に干燥する時は瞬時にして死するものなり。其原因は詳細なる能はざるも要するに有機体の硬化と精の分離とは昆虫のみならず。一般生物の自然に來る死の一徑路にして又不自然なる死に有りても逆に有機体の硬化によりて死を誘引し安き如しとは精を有機体より分離する方法によりて死を誘致し、従つて精の存在

を証明せんと試みたる一例なるも硬化が死の原因となれるも精の分離の原因なる事は容易に証明し難きを以て未だ昆虫に精有りとなす實驗としては一般的讀者に對して不適當なる如し。

只精の存在の如きは實驗に於て容易に理解し難きも全篇を通じて説明したる推理により勿論充分なるも何とか實驗によりて精の存在を証明したき物なり。而し精其れ自身不知覺なるものなれば易々たる業に非らず。

然れども強て實驗を要するとせば生物磁氣の實驗によりて昆虫の精の存在を証明し得るものなり。

そは最も簡單にして死して間もなき昆虫に自己の磁力を作用せしめて蘇生せしむる練習なり。自分は蠅によりて實驗したる事有るも蠅の如き飛趙する虫に有りては困難なり。赤蟻の如き強き精を有するものを實驗する事に

於て最も適當なりとす、ちと残酷なれども赤蟻を擦硝子面に捻り潰して注視すべし。若しくは自己の掌上に置くべし、然る時は蟻は自己の磁力圈内に置かれ有るを以て他の場合よりも有機体の動く時間は比較的永きなり。殆ど粉の如くなりても尙部分部分に於て微動を感ずるならん。其は蟻の精の如きは群生する社會と絶体的安全なる強き位置に有ることを以て生微化する事少なく仔体の交代により永き年代を精として存在し得るを以て精の知覺強固なり。従つて其存在の如きも容易に認め得べきものなり。反對に他の弱者の置位に有る虫の精の如きは常に強敵に劫かされて畏縮する習慣を有し、若しくは強食となりて生微化するを以て精として永く存在する事難く、従つて強執ならざる理なり其死後磁氣反應によりて蘇生し難きは畏縮によりて、直ちに仔体との連絡を絶ち再び有機体に歸着せざればなり。然れ

ども生殖後の雌虫に於ける半獨立的なる精に有りては其仔体の死後に有りても容易に畏縮し飛散する事なく、直ちに仔体の腹方部に歸着し胎内の卵子を保護するものなり。彼の蠶蛾の雌虫を産卵を前にして殺したりとせば十中八九は仔体の死後尙腹尾に歸着して産卵作用を完成するものなり。

微生物の如きは死と体との關係は高等生物の如く明瞭ならず。又稍高等なるクマ虫の如きは有機体が乾燥して褶片となり恰も塵埃の如く枯渴しても尙再び水雨に浸透して蘇生し活動を開始する等、明に有機体と精の存在を理解するに非らざれば殆ど説明し難きものなりとす。

昆虫の精のみならず、人類の靈の存在に有りても實驗によりて一般人士に示す事は不可能なり。幻視、幻聽、の如き變体的實驗を借りるに非らざれ

りては人靈の存在も知覺し難し、近來歐米等の靈理學者は靈の紫外線反應或は寫眞の種板等に反應する事を主張するものも有り、彼等は光線反應により靈の幽体はエーテルと同一物なりとなせり。然れどもエーテルは生微素の性質の豫想とは一致せざる如し。況んや靈子の説の如き靈の微細なる一出顯狀態の如きは瀾蔓性なるエーテルとも思爲せられざるなり。

幻聽、幻視覺は米國にて余の親しく體驗したる所にして彼地の或る人士に其事實を語つたる事も有り。尙其後の研究により一般靈理論者と等しく病的現象以外に神意啓示として重大なる事柄と見做す一人となれり。即ち本論の如き突飛なる事を陳べて臆面もなく讀者に閲讀の勞を強ゆるは斯くの如き動機に基因したるものにして余一個としては到底本書の如きを出版し得る勇氣なきものにて加之す。餘りに一家言に似たる獨斷的論法を敢て

做し得ざるものなり。

(完)

大正十二年十月廿五日印刷
大正十二年十一月十日發行

定價壹圓五拾錢

著作兼發行者

豐橋市大字中世古字前田二十九番地

内 山 和 市

印刷者

豐橋市大字西八、九拾貳番地

田 中 周 平

印刷所

豐橋市大字西八、九拾貳番地

三 陽 堂

豐橋市大字札木

發賣所

文海堂書店



290
1
598

終

